

高校生活で養う課題意識・コミュニケーション力 これからの推薦・AO入試指導

社会や大学で求められる力、進学してからの学びや将来のデザインを問われる推薦・AO入試。筆者の藤岡氏はプロジェクト学習(PBL)を実践し、その成果を生かした合格を多く生み出してきました。今号では、PBLに向かう基礎となる力をどう育むか、文学や美術にそのヒントを探ります。

藤岡慎二

株式会社
Prima pinguino
代表取締役

第 9 回

合格につながる基礎固めの ヒントは文学・美術に



ふじおか・しんじ ● 1975年生まれ 慶應義塾大学大学院修了。数学や生物の大学受験対策を教える塾講師を経て、大学院でキャリア教育の重要性に気付き、研究を開始。小学生から社会人までを対象とした現場指導経験を有し、推薦・AO入試対策、社会人基礎力の指導や教材・プログラム開発を大手大学受験予備校や高校・大学で行う。島根県立隠岐島前高校をはじめとし、行政と協業し教育を通じた地方創生に取り組む。現在、北海道から沖縄までの高校魅力化プロジェクトに参画、高校連携型の公営塾を運営。

私は推薦・AO入試対策を、島根

県海士町の公営塾での「夢ゼミ」をはじめとするプロジェクト学習を中心に実施してきました。社会課題や自身の興味・関心に向き合い、解決を目指す学習の中で、将来の夢やキャリアデザインを明確化すると同時に、社会に出て求められる力と学習意欲を醸成するプログラムです。

今までの実践についての講話を生方にする、「今までの教育方法がガラリと変わるのでしょうか？」とよく聞かれます。確かに、課題発見・解決型キャリア教育、課題発見・解決型学習という言葉は、目新しさを感じてほしい。

しかし、私は今までの実践から、既存の学校での教育内容は、今後のプロジェクト学習、さらには推薦・AO入試対策を進めるうえでの基礎になると考えています。今号では、中でも文学・美術の意義について考えていきたいと思っています。

当事者意識を生み出す価値観は 文学から形作られる

プロジェクト学習での課題のひとつは「生徒が熱中できるテーマを選択できない」ことです。こういった学習では生徒が地域や社会に興味をもち、飛び出し、多様な職種における課題、または社会課題に出会えます。そして課題解決に取り組みながら自身の進路意識を高めていきます。しかし、多様な課題に出会うほど、どの課題に取り組むか迷うものです。

選ぶという行為は、選択肢と選択軸により成立するので、選択軸が重要となります。そして選択軸とは、生徒個人の価値観だと私は考えます。生徒自身がその課題やテーマに取り組み理由が、生徒の価値観などの内発的な動機から派生した場合、生徒は熱中し、主体的かつ意欲的に当事者意識をもち、取り組むでしょう。内発的な動機で臨む学びは「フロー状

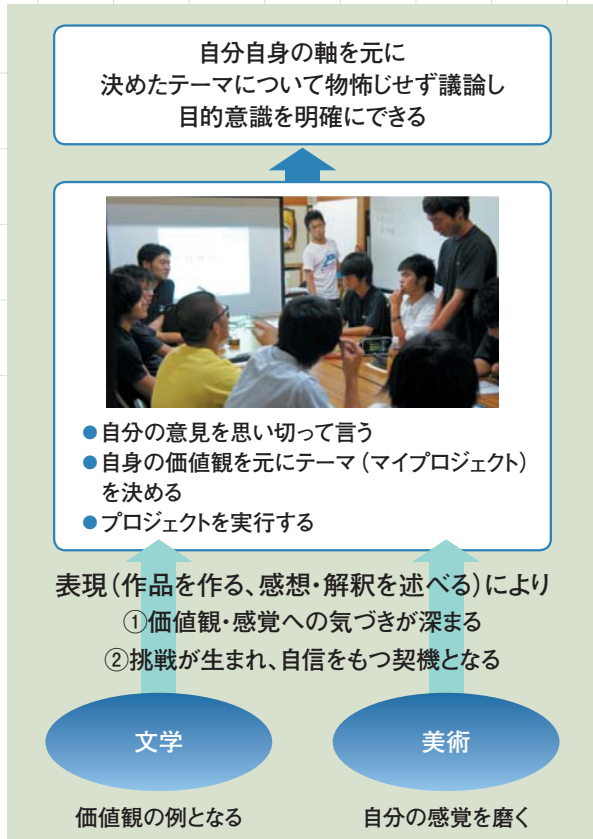
態」(※)や「ゾーン」とよばれる没入体験を生み、学びを最大化させます。

価値観を言語化したうえで、社会が求めていること、困っていること、決しなければならぬことが明確になれば、その結節点が社会における自分の居場所と出番であると実感し、生徒自身が果たすべき使命や夢、志が生まれます。しかし、この価値観をゼロから紡ぎだすことは当然、難しい。せめて価値観の例があると考えやすいものです。

私は価値観の例は名作といわれる文学作品の中にあると考えています。『若きウエルテルの悩み』や『ライ麦畑でつかまえて』、カフカの『変身』など主人公である青少年が考え、悩み、行動し、行き着いた旅の過程に彼ら彼女らなりの価値観が見え隠れする。多くの文学作品から、自分に似た主人公の群像から、自身の価値観を見いだすヒントが得られるのではないのでしょうか。自分に似た主人公が登場

※フロー(英: Flow)とは、人間が物事に、完全に没入し、精神的に集中している感覚に特徴づけられ、完全にのめり込んでいて、その過程が活発さにおいて成功しているような活動における、精神的な状態をいう。ZONE、ピークエクスペリエンスとも呼ばれる。

図表1 PBLと文学・美術 (隠岐ノ国学習センターの「夢ゼミ」を例に)



する愛読書を持ち、名言や気に入ったフレーズから価値観を巡る心の旅をするように生徒に勧めています。ぜひ、国語の先生のみならず多くの先生方に、愛読書や好きなフレーズを生徒に紹介してほしいと思います。

物怖じせず意見を発する 姿勢を生み出す美術

プロジェクト学習などの実学とは距離があると思われるアートは、実学の実験ではないかと考えています。上の写真は私がニューヨーク近代美術館に行ったときの写真です。そこでは、子どもたちが先生とアート作品を見て回っていました。先生が「この絵を見て何を思う? どう感じる? 」と子どもたちに問いかけると、子どもたちは、思い思いに「苦い! 辛い! 」とか、「なんか怒ってる感じ」とか、自由に感想を表現していました。日本であれば先生による作品解説が中心かもし

れません。しかし、この先生は子どもたちの感想をひとしきり聞いて、早々と次のアート作品に行き、同じことを繰り返していました。子どもたちの「寒い! お腹にどーん! って感じ」という言葉が美術館に響きます。プロジェクト学習のように、生徒が主体的に意見を言う場面が多い時ほど、意見を言う生徒は大体決まってきます。クラスで自分の意見を述べる生徒が大体決まっているのと同じです。意見を言える生徒と、そうでない生徒は何が違うのでしょうか。美術関連の仕事をしている方にアートの社会的な意義は何かと聞いたことがあります。彼は「アートの前では人は平等であり、自由だ」、「アートには答えがない。一人ひとりの感覚や考え、解釈があつてこそ。そこに答えはないし、解釈は多種多様でいい。むしろ、アートに対する解釈や感想が、自分の感覚に気付かせるきっかけになる」と教えてくれました。アートを通じた感想には正解がありません。ゆえに誰かに評価されるものではなく、自身の感想を堂々と述べてよい。すべての感想が答えであり、多様であるほど良いのです。感想や意見を述べることに慣れた子どもたちは、自分の感想や意見を物怖じせず言えるようになるでしょう。「寛容

あつてこそその挑戦」と言われています。アートは寛容だからこそ、挑戦が生まれます。やがて自身の意見に自信をもつきっかけになるのではないのでしょうか。

プロジェクト学習では、自身の意見を発する主体的な関わりが求められます。その姿勢を育むのに美術は有効です。実は、美術教育と成績向上の関連性を示す論文も存在しています。美術における鑑賞教育の先進事例は、他教科でも参考になるかもしれません。

教科の意義を問い直し 新たな学力観に継ぎ直す

以上、文学や美術はプロジェクト学習を進めるうえでの基礎になる力や姿勢を育むということについて述べてきました。時代の変化により、今までの教科の意義を問い直し、今後、新たに必要とされる学力と関連づけることが大切になってくるでしょう。受け継ぐ、とは「先人から受けて、今に合う形で継ぎ直すこと」という意味です。高大接続において新たな学力観が提案される今こそ、今までの教育を受け、継ぎ直すことが必要になるのだと思います。